

価値表現の両極の「逆の連関」について (下)

——宇野理論の一検討——

尼 寺 義 弘

はじめに

一 宇野氏の問題提起

二 価値表現Ⅱ交換欲望の表現

三 価値表現Ⅱ超歴史的関係の表現

四 宇野氏の価格形態

小結 (以上、『阪南論集』第六巻 一九七二年)

五 「逆の連関」否定の理由——玉野井芳郎氏の主張を中心に——

六 マルクスの価値表現

七 「価値関係」の含む二つの意味——同等性関係と価値表現——

八 玉野井氏の主張の検討(一)

九 玉野井氏の主張の検討(二)

十 玉野井氏の主張の検討(三)

十一 玉野井氏の主張の検討(四)

むすび (以上、本巻)

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

1562

1561

阪南論集 第八巻

二

五 「逆の連関」否定の理由

——玉野井芳郎氏の主張を中心に——

われわれは、これまで、宇野氏が商品所有者の欲望にもとづいて価値表現の両極の「逆の連関」を否定される理由(一)を検討してきた。

次に、もう一つの「逆の連関」否定の理由(二)を考察することにしてしよう。

理由(二)は、『資本論』が価値形態を論ずるにさきだつて、価値の実体規定を与えていること、そして同等性関係としての価値関係を前提して価値形態を展開していることを批判することにつきている。同等性関係としての価値関係を前提すると、価値表現は相対的な価値表現ではなくて、相互的な価値表現——「逆の連関」の成立——となり、価値表現の核心であるとする氏等のいわゆる両極の「対極性」の意味が失われる。だから、相互的な価値表現は本来の価値表現ではない。したがって、「逆の連関」は成立しないとするのである。

われわれは、以下において、宇野氏の主張にくみする玉野井芳郎氏の見解を理由(二)の代表例として検討する。玉野井氏によれば、マルクスの価値形態論には論理的に「整合⁽⁵⁾」していない二つの「分析視角⁽⁶⁾」が交錯しており、古典経済学からの「脱化⁽⁵⁾」が完成していない。その二つの視角は、「古典経済学の継承面を含む労働価値説⁽⁶⁾」Ⅱ「価値実体論」と、それを「批難しているマルクスの論理すなわち価値形態の論理⁽⁶⁾」Ⅱ価値表現の「対極性⁽⁶⁾」とである。氏は前者をして後者とは相いれることのない「異質的論理⁽⁶⁾」として、「価値実体論」を放逐し、「価値形態の論理」で、マルクスの価値形態は純粹に「抜き固め⁽⁶⁾」ねばならない、と言われる。氏のいわゆる「価値形態の論理」はつきぎのようである。

「価値表現を価値形態として特徴づける規定はその対極の規定にほかならず、たとえば、一商品の価値の他商品による価値表現においては、等価形態に立つ商品のほうは相対的価値形態に立つ商品の価値を表現する材料として機能するだけで、けっして自分の価値を表現する立場にはない、いいかえると等価形態に立つ商品上衣は同時に相対的価値形態に立つことはできない、からである。」⁶⁰⁾

すなわち同じ価値表現において、相対的価値形態に立つ商品の価値のみが表現されるのであって、同時に等価形態に立つ商品の価値は表現されない。マルクスの本来の価値表現はまさにそれである。

ところが、氏によれば、マルクスの価値形態には、それとならんで相互的価値表現が混在している。つまり同じ価値表現において、等価形態に立つ商品の価値も同時に表現される、という価値形態である。何故か？氏は言われる。(玉野井氏による『資本論』からの引用文は氏の訳文どおりである。以下、同様。なお、私の『資本論』からの引用文のうち氏の訳文にあわせるため、一着の上着を一枚の上衣と訳している。ただしこの訳文のみである。)

(1) 同等性関係としての『価値関係』をまず設定したうえで、これから出発して価値表現を説くことになると、それはせいぜい、たとえばリンネルの価値存在は上衣との等置関係において現出する、と説くよりほかにはないことになるが、そうとするとこの場合『上衣がリンネルと同一であるのは、ただ両者が価値であるかぎりにおいてある』、すなわち両者はいずれも価値としての意義をもって登場し、かかるものとして対立しあっているのであるから、リンネルの価値が上衣で表現されるといえば、同時に上衣の価値もリンネルで表現される、といわなければならぬ。『さうでないか。』⁶¹⁾

1560

(2) 「リンネルが価値物としての上衣に関連すること、したがってこのばあい上衣がリンネルと同じ価値物としての意義をもって登場していることが、上衣がリンネルの価値の現象形態となる理由にあげられているが、同時にま

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

三

阪南論集 第八卷

四

1559

たこのばあいリンネルのほうも、それが上衣と本質のひとしい、同じ価値物であるということが、むしろ右の理由のうちにふくまれているのであって、そうである以上は、同時にリンネルも、上衣の価値の現象形態となる、という命題がここに成立するということも、否定しがたいであろう。しかしそうになると、これは明らかに価値形態の対極の規定と抵触する。この規定によれば、等価形態にある商品上衣は、同時に相対的価値形態に立つことはできないからである。」⁶²⁾

(1)、(2)の氏の主張は相互的な価値表現を「理由」づけるものであろうか。われわれは氏の主張を検討するまえに、マルクスが価値表現をどのように把握していたかをみることにしよう。

- (1)(2)(3) 玉野井芳郎「マルクス価値論と古典経済学」大河内一男他編 矢内原忠雄先生選歴記念論文集 上巻『古典派経済学研究』所収。同書一七四頁。岩波書店。昭和三十三年。以下「古典」と略記する。
- (4)(5) 玉野井「古典」一七七頁。
- (6) 玉野井「マルクスの価値形態論について」鈴木鴻一郎他編 宇野弘蔵先生選歴記念論文集『マルクス経済学大系』上 所収。同書一三九頁。一四二頁。岩波書店。一九五七年。以下「価値形態論」と略記する。および「古典」一八三頁。参照
- (7)(8) 玉野井「古典」二〇一頁。
- (9) 玉野井「古典」一八三頁。
- (10)(11) 玉野井「価値形態論」一三七—一三八頁。

六 マルクスの価値表現

価値表現の両極を構成する二商品は具体的な姿、使用形態においては、互いに全く異なるものである。そして異

なる二商品が価値表現において互いに関連するのは、それらが価値としての意義をもつかぎりにおいてである。つまり、両商品が価値として同等であり、本質が等しいものだからである。この点にこそ、 $20\text{ Heller} = 1\text{ Mark}$ という価値等式の $=$ の意味もある。したがって、 $=$ は価値表現の基礎であり、両商品の同等性関係としての価値関係を表示しているのである。そして商品の価値なるものが商品世界の社会的単位であり、社会的性格を有するものであるから、商品は自分の価値を自身の使用価値、商品体ではけっして表現できず、他商品の使用価値、商品体を通してのみ表現しうるのである。

価値表現の根本的な「メカニズム」は、この $=$ の前提のもとに一商品が他商品を「値する」ものとして自身自身に等置すること、そして他商品の商品体そのものに価値物としての定在形態を与えたいうえて、その他商品で自分の価値を表現するということである。

だから「リンネルの価値は他の商品によつてのみ、すなわち相対的にのみ表現されうる。したがって、リンネルの相対的価値形態は何かある他の商品がリンネルに対して等価形態にあることを前提としている。他方では、リンネルの等価物として現われる、したがって等価形態にある、かかる他の商品、ここでは上衣は、同時に相対的価値形態にあることはできない。かかる商品は自分の価値を表現しない。その商品はただ他の商品の価値表現に材料を提供するだけである。」⁵⁾

このように、価値を表現する商品(相対的価値形態の商品)と、その表現の手段となる商品(等価形態の商品)とは厳密に区別されているのである。これは氏の言われる「対極性」であり、価値表現の根本前提である。 $20\text{ Heller} = 1\text{ Mark}$ という価値表現は、リンネルの価値の上衣による表現であり、けっして上衣の価値のリンネルによる表現ではない。すなわち「ここでは上衣は、同時に相対的価値形態にあることはできない。」とマルクスは述べてい

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

五

阪南論集 第八卷

六

1557
る。上衣の価値のリンネルによる表現のためには、右の等式の右辺と左辺をとりかえねばならない。すなわち、 $20\text{ Heller} = 1\text{ Mark}$ なる価値表現が与えられねばならないのである。マルクスは、この点を次のように強調している。

「 20 Heller のリンネル $= 1$ 枚の上衣、 1 枚のリンネルは一枚の上衣に値する、という表現は、 1 枚の上衣 $= 20\text{ Heller}$ の 20 Heller を 1 は、一枚の上衣は 20 Heller のリンネルに値する、という逆の連関をも含んでいる。しかし、上衣の価値を相対的に表現するためには、私はとにかく等式を転倒させねばならない。そしてそうするやいなや、上衣のかわりにリンネルが等価物となる。したがって、同じ商品は同じ価値表現において、同時に両形態をとって登場することはできない。それどころか、両形態は分極的に排除しあうのである。」⁶⁾

このように、一つの価値表現は、それと逆の価値表現を含んでいる。しかし一商品は、同じ価値表現において、同時に相対的価値形態と等価形態をとりえないこと、すなわち「対極性」をマルクスは強調しているのである。にもかかわらず、氏は同等性関係としての価値関係を前提すると、「相互的価値表現」⁶⁾ すなわち同じ価値表現において、同時に等価形態の商品の価値も表現される、と言われる。これには同等性関係としての価値関係の理解に問題があるのではなからうか。

われわれは、いまや問題となつてゐる価値関係とはいかなる関係を意味するのであるかをみることにしよう。

- (1) 久留間敏造『価値形態論と交換過程論』五二頁。
- (2) (3) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 765.
- (4) 玉野井「価値形態論」一三九頁。

七 「価値関係」の含む二つの意味——同等性関係と価値表現——

われわれは、『資本論』の価値関係 (Wertverhältnis) が次の二つのことを意味していると考える。

(一) 同等性関係 (Gleichheitsverhältnis)

商品世界(単純な価値形態においては二つの商品)における一商品と他の諸商品との質的な同等性。すなわち、異なる商品が \parallel として等置されるのは両者に共通する同等な性格が存在するからである。

したがって、商品の同等性関係は同等な性格、つまり価値という社会的性格を各商品が含んでいること、その社会的性格という側面からみて異なる商品が同等であること、ひとしいこと、その関係を意味する。この場合、商品の使用価値は度外視されている。

だから、価値という社会的単位の大きさに応じて商品はいずれの商品とも交換可能であり、相互にとりかわりうる。だから、同等性関係においては、 \parallel とおかれた双方の商品が互いに位置をかえてもその内容は同じであり、意味はけっして変らない。位置をとりかえること。マルクスは述べている。

「交換価値の実体が、商品の物理的な、手でつかみうる存在、あるいは使用価値としての商品の定在とは全く異なるものであり、独立のものであることを、商品の交換関係はひと目で示している。その交換関係はまさに使用価値の捨象によって特徴づけられている。何となれば、交換価値の側面から考察すれば、一商品は、それがただ正當な比率で存在しさえすれば、いずれの他の商品ともまったく同じだからである。」⁵¹⁾

商品の「交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、それがただ適当な比率で存在しさえすれば、いずれの他

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

七

1556

阪南論集 第八卷

八

1555

の使用価値ともまったく同じだけのものと認められるのである。あるいは、かの老バーボンが言っているように、「一つの商品種類は、その交換価値が等しい大きさならば、他の商品種類と同じである。等しい大きさの交換価値をもつ諸物のあいだには差異も区別も存在しない。」⁵²⁾

「内容からみれば、

(I) 20ヘルツのウルクネン=1枚の上衣 あるSは、二〇ヘルツのリンネルは一枚の上衣に値する、

(II) 1枚の上衣=20ヘルツのウルクネン あるSは、一枚の上衣は二〇ヘルツのリンネルに値する、という両方の表現はまったく相違がない。」⁵³⁾

このようにマルクスは等置される二商品の関係を述べている。そして二商品の同等性関係を抽象し、価値の実体を析出するのは、第一章「商品」の第一、二節でおこなっている。これは分析者の立場から第三者的にみたものである。

同等性関係を分析するのは、ヘーゲルの『論理学』の「本質論」の区別の諸規定、すなわち、差別——対立——矛盾という認識の進行における差別の段階にあてはまる。差別は異なる二つのものを比較して、それらから共通なものを抽象することである。そしてこの共通なものが同等性 (Gleichheit) である。商品の分析は、異なる商品が \parallel として等置されることから、両者に共通な性格をみいだすこと、そしてその共通なるものの実体はなにか、をみいだすことである。したがって、商品の同等性関係は異なる商品が共通な性格、同等性を有する、という関係である。だから、価値という同等性関係の内容からみれば、等置される二商品の位置をとりかえうるし、とりかえても意味は同じなのである。

(二) 価値表現 (Werausdruck)

商品の同等性関係を基礎とした、一商品の他商品による価値表現。商品の価値なる社会的性格の他商品による表現。マルクスは述べている。

「上衣がリンネルと同じであるのは、両者が価値であるかぎりにおいてのみである。したがって、リンネルがそれと同等なものとしての上衣と関係をむすぶということは、あるいは上衣が同じ実体の物としてリンネルに等置されるということは、上衣はこの関係において価値として意義をもつということを表現する。上衣がリンネルに等置されるのは、リンネルも同様に価値であるかぎりにおいてである。したがって、同等性関係は価値関係であるが、しかしその価値関係はなによりもまず、自分の価値を表現する商品の価値の、あるいは価値存在の表現である。使用価値あるいは商品体としては、リンネルは上衣と区別される。これに反して、リンネルの価値存在は、ある他の商品種類、上衣がリンネルに等置される、あるいはリンネルと本質の同等なものとして意義をもつところの一つの関係において出現し、自分を表現するのである。⁶⁵⁾」

このように価値表現は同等性関係としての価値関係を基礎としている。だが、 $\text{ニクヤニ} \parallel \text{トヤ}$ は、リンネルの価値の表現であり、リンネルが表現のイニシアティブをもっている。したがって上衣は受動的であり、上衣の価値の表現ではけっしてない。 $\text{ニクヤニ} \parallel \text{トヤ}$ と $\text{トヤ} \parallel \text{ニクヤニ}$ とは、価値表現という形態から見ると正反対の意味をもつのである。

「相対的価値と等価とは、ともに、ただ商品価値の諸形態である。ある商品がいま一方の形態にあるか、またはそれと分極的に対立する形態にあるかは、もっぱら価値表現におけるその商品の位置に依存している。このことは、われわれによってここでまず考察されている単純な価値形態において的確に現われる。内容からみれば、

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

九

阪南論集 第八卷

一〇

1553

(一) 20ヘルレのリンネル \parallel 1枚の上衣 あるとせば、 二〇ヘルレ のリンネルは一枚の上衣に値する、

(二) 1枚の上衣 \parallel 20ヘルレのリンネル あるいは、一枚の上衣は 二〇ヘルレ のリンネルに値する、という両方の表現はまったく相違がない。形態からみれば、たんに相違しているだけでなく、相対立している。(一)の表現においては、リンネルの価値が相対的に表現される。したがって、リンネルは相対的価値形態にあるが、一方ではそれと同時に、上衣の価値は等価として表現されている。だから上衣は等価形態にある。いま(一)の表現を逆に向けかえるならば、私は(二)の表現をうけとる。二つの商品はその位置をかえる。そしてただちに上衣は相対的価値形態にあり、リンネルは反対に等価形態にある。これらの商品は、同じ価値表現におけるそれぞれの位置をかえたのだから、その価値形態をかえたのである。⁶⁶⁾」

このように、価値を表現する商品と表現手段となる商品との区別、「対極性」を述べている。マルクスが(一)、(二)の表現は内容からみればまったく相異しないが、形態からみれば相異しているのみならず相対立している、と述べているのは同等性関係と価値表現との区別をつけたものである。

価値表現の両極の商品の位置をとりかえると、正反対の意味の価値表現となる。その場合、いずれの表現形態においても相対的価値形態の商品の価値が表現されるのである。だから「対極性」とも「抵触」⁶⁷⁾しないし、まして同時的な相互的価値表現を述べているのではない。

価値表現の両形態の区別は明確である。というのは商品の価値が自然的関係でなく、社会的関係をあらわすものであるから、価値を表現する場合、その商品自身の体で表現できず、「回り道」⁶⁸⁾をすること、すなわち他商品を通してのみ表現しうる。だから相対的価値形態にある商品は、必ず等価形態に何らかの他商品を表現手段として等置せざるをえない。したがって、価値表現の両極は、相互に相手を予想しあう関係、反省関係にあり、不可分であ

る。この関係は「本質的な区別」⁵⁾であり、さきに述べたヘーゲルの「対立」にあてはまる。価値表現は、このように両極の対立、氏のいわゆる「対極性」という関係、反省関係にあるが、どちらの極の商品が主要なモメントであるかといえば、相対的価値形態にある商品である。マルクスは述べている。

「*ウーケン*—上衣—において「自分の価値を表現しようとするのはリンネルであるから、主導権はリンネルもつ。」⁶⁾そして上衣はリンネルの価値表現の材料として役立つにすぎない。「上衣の等価存在は、いわばリンネルの一つの反映規定にすぎない。」⁷⁾

「だから価値関係の内部では、相対的価値形態にある商品の価値が、本質であり、等価形態にある商品がその現象形態である。」⁸⁾

したがって、相対的価値形態にある商品の価値のみが表現されるのであって、等価形態にある商品の価値も同時に表現されるといふのではけっしてない。だからこそ、価値表現の両極の商品の位置をとりかえると正反対の意味をもつこととなるのである。

だから、同等性関係のように、⁹⁾と置かれた両商品をとるかえても内容は同じというのではない。価値表現は価値を表現する商品と表現の手段となる商品との形態的区別であり、その商品がどちらの形態に位置するかによって定まる。したがって、マルクスの価値表現は「対極性」に反する相互的価値表現ではけっしてない。

- 1552
- (1) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, SS. 3-4.
 - (2) K. Marx, Das Kapital, Buch I, Werke, Bd. 23, S. 52.
 - (3) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 766.
 - (4) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 767.

価値表現の両極の「逆の連関」について(一)

一一

阪南論集 第八卷

一一

1551

- (5) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 766.
- (6) 玉野井「価値形態論」一三八頁。
- (7) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 20.
- (8) Georg Wilhelm Friedrich Hegel, System der Philosophie. Erster Teil, Die Logik. Hegel-Sämtliche Werke, Bd. 8, Hrsg. von H. Glockner, S. 276. Friedrich Frommann Verlag, 1964. 松村一人訳『小論理学』下巻二八頁。岩波文庫 昭和四十一年。
- (9) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 766.
- (10) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 22.
- (11) 見田石介『資本論の方法』一九七頁。弘文堂。昭和三八年。

八 玉野井氏の主張の検討 (一)

われわれは、以上みてきたように、価値関係に含まれている同等性関係と価値表現との区別と連関について述べてきた。

さて、われわれは右のことを前提として、さきに五で引用した氏の主張(1)、(2)を検討することにしよう。

はじめに述べておかなければならないことは、氏は価値関係にふくまれている二つの意味を同じもの、さらに言うならば、同等性関係という意味にのみとっているのではないか、ということである。なぜなら、「価値関係」はもっぱら二つの商品のあいだの『同等性関係』を代表するものとされているにすぎないからである。¹⁰⁾

(1)の引用文で、氏はつぎのように言われている。

「両者（リンネルと上衣——引用者）はいずれも価値としての意義をもって登場し、かかるものとして対立しあっ

ているのであるから、リンネルの価値が上衣で表現されるといえば、同時に上衣の価値もリンネルで表現される、といわなければならぬ。はしないか。⁽⁶⁾

つまり、氏においては、両商品が「等置関係⁽⁶⁾」にあり、「価値としての意義をもって登場」すること、すなわち同等性関係が同時に価値表現である。だから、リンネルの価値表現である、ニバツネニハタにおいて、同時に上衣の価値も表現されるのである。つまり、リンネルと上衣をとりかえても内容が同じであり、意味がかわらない同等性関係を価値表現とみているのである。だが、さきにもたように同等性関係は価値表現の基礎ではあっても、価値表現とはまったく異なるものである。

商品の価値表現は、右の同等性関係を前提として、観念的に、頭の中でとらえられた商品の価値なる社会的性格が「いかにして」他商品で具体的に表現されるのか、という問題である。これは周知の「回り道」によって明らかである。さらに、価値表現の主体となる商品、主導権をとる商品は、いずれの商品か。マルクスは述べている。

「自分の価値を表現しようとするのはリンネルであるから、主導権はリンネルがもつ。」⁽⁶⁾

「価値形態の両方の規定は、あるいは交換価値としての商品価値の表示の両方の仕方は、たんに相対的であるとはいっても、両方が同じ程度に相対的にみえるわけではない。そのHäufigkeit und Menge der Arbeit」というリンネルの相対的価値において、リンネルの交換価値は、他の一商品に対するリンネルの関係として明確に表示されている。またなるほど、上衣はそれ自身として等価物であるのは、リンネルがそれ自身の価値の現象形態として、したがってまたリンネルと直接に交換されるものとして、上衣と関係するかぎりにおいてである。この関係の内部においてのみ上衣は等価物である。しかし上衣は受動的にふるまう。それはけっして主導権をとらない。上衣はみずから関係させられるがゆえに、その関係にある。⁽⁶⁾」

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

一三

阪南論集 第八卷

一四

1549

このように、リンネルが価値表現の主導権をとっており、主体である。上衣は表現手段として役立っているにすぎない。だから受動的であり、従属している。つまり「対極性」そのものである。だから、相互的な価値表現ではけっしてない。

(2)の引用文を検討しよう。氏は言われている。

「リンネルが価値物としての上衣に関連すること、したがってこのばあい上衣がリンネルと同じ価値物としての意義をもって登場していることが、上衣がリンネルの価値の現象形態となる理由にあげられているが、同時にまたこのばあいリンネルのほうも、それが上衣と本質のひとしい、同じ価値物であるということが、むしろ右の理由のうちにもふくまれているのであって、そうである以上は、同時にリンネルも、上衣の価値の現象形態となる、という命題がここに成立するということも、否定しがたいであろう。しかしそうすると、これは明らかに価値形態の対極的規定と抵触する。この規定によれば、等価形態にある商品上衣は、同時に相対的価値形態に立つことはできないからである。⁽⁶⁾」

はじめに、氏は「リンネルが価値物としての上衣に関連する」と言われるが、上衣がリンネルの価値物となるのはどうしてであろうか。

それは、リンネルが自分自身に上衣を等置し、上衣という具体物に価値物としての経済的形態規定性を与えること、この「回り道」によってはじめて、リンネルは等価物としての、価値鏡としての上衣で自分の価値を表現することができるのである。だから、上衣は他商品の価値表現の材料として役立つ場合にのみ、上衣そのものが価値物なのである。このように、価値表現のイニシアティブはリンネルがとっているものであり、氏の言われる「対極的規定と抵触」しない。だからけっして相互的な価値表現ではない。

ところで氏は「上衣がリンネルと同じ価値物としての意義をもって登場」することは、リンネルも「それが上衣と本質のひとしい、同じ価値物であるということが、むしろ右の理由のうちにくまれている」から上衣の価値も同時にリンネルで表現される、として氏のいわゆる「対極性」の規定に「抵触」することを心配される。

だが、氏の主張には区別して論じなければならぬ二つのことが一つのこととしてたえず同一視されている。すなわち、リンネルも上衣も「本質のひとしい同じ価値物である」ということから、ただちにリンネルの価値表現は同時に上衣の価値表現でもある、ととらえられているのである。

「本質のひとしい同じ価値物である」ということは、すでにのべたように、同等性関係としての価値関係を意味する。つまり、価値としては、リンネルと上衣とは同じ実体をもつものであり、価値であるかぎり両者はつねに交換可能であり、位置をとりかえても内容はすこしもかわらない。だが、*Value* という価値表現はリンネルの価値の表現であり、けっしてその逆の表現ではない。そして、もしも両商品がそれぞれの位置をとりかえると意味の正反対の価値表現、上衣の価値表現となる。したがって、リンネルの価値表現が同時に上衣の価値表現でもある、という「命題」は、けっして成立しない。

同等性関係としての価値関係と、価値関係にふくまれている価値表現とは意味のまったく異なる命題である。したがって、価値関係にふくまれている二つの意味の区別と連関を明確にしておかなければ、いわゆる相互的な価値表現となるのである。

1548

さらに、氏の言われるように、二商品が「同じ価値物としての意義をもって登場」するのであれば、二商品はそれぞれ自分自身で「価値物」であると宣言しているのであるから、わざわざ他商品に関連しなくても表現できるはずであるし、他商品を通しての価値表現などまったく必要としないであろう。だが、氏の場合、マルクスと同じく

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

一五

阪南論集 第八卷

一六

1547

他商品、上衣へ関連づけているのはなぜであろうか。それこそが問題である。

二商品は価値としては同等であり、本質はひとしくても、他商品の助力なしには価値物である、と自分自身では表現できない。そここそ商品の価値表現のゆえんでもあるのである。そして等価形態の商品体そのものが、価値体であるのは、その商品が価値を表現すべき他商品に等置されて、価値体としての新しい経済的形態規定性をうけてのみ価値物として定在しうるのである。だから、両商品は価値をふくんでおり、いわゆる価値物であるが、商品体そのものが価値物として登場すること、すなわち自分自身で価値物であると宣言することはできないのである。

- (1) 玉野井「価値形態論」一三七頁。
- (2)(3) 玉野井「価値形態論」一三八頁。
- (4) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 766.
- (5) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 22.
- (6) 玉野井「価値形態論」一三八頁。

九 玉野井氏の主張の検討 (二)

以上、述べてきたことから明らかなように、価値表現において、一方では価値を表現する商品が表現のイニシアチブをとり、能動的役割を演ずる。他方では表現の手段となる商品は受動的な役割を演ずる。この区別、すなわち「対極性」は『資本論』では明確である。

ところが、玉野井氏は『資本論』の価値表現が相互的な表現であることをさらに強調するために次の三つの文を

引用される。

(1) 相対的価値形態と等価形態との『この区別は、相対的価値表現の簡単な・または第一の形態においては、相対的価値表現を特色づける一つの特徴によって、あいまいにされている。20ヘンツのニクネン＝1枚の上衣、あるいは二〇エルレのリンネルは一枚の上衣に値する、という等式は、明らかに、1枚の上衣＝20ヘンツのニクネン、あるいは一枚の上衣は二〇エルレのリンネルに値する、という同一の等式をふくんでいる。かくして上衣がそこで等価としての役割を演ずるリンネルの相対的価値表現は、リンネルが等価としての役割を演ずる上衣の相対的価値表現を、逆の関係においてふくんでいるのである。』(傍点は玉野井氏)

これでは相対的価値表現はたんなる相互的価値表現とひとしいではないか。³⁾

(2) 『第一の形態——20ヘンツのニクネン＝1枚の上衣——は、すでにこの対立(相対的価値形態と等価形態との対立——玉野井氏)をふくんではいるが、これを固定させてはいない。同じ等式が順に読まれるか逆に読まれるかにしたがって、リンネルと上衣というような両商品極のおのが、同じように、あるときは相対的価値形態に、あるときは等価形態にある。このばあいでは、両極的対立をとり押えるにはまだ骨が折れる。』³⁾

(3) 『相対的価値の簡単な形態、あるいは二つの商品の等価の表現においては、価値の形態の展開は、双方の商品にとって一様である。もつとも、そのたびごとに反対の方向にはあるが、さらに相対的価値表現は、双方の商品のおののに関して統一である、なぜならリンネルはその価値を一つの商品、上衣でのみ表示し、また逆のばあいは逆だからである。しかしこの価値表現は、双方の商品にとって、二重であり、そのおのののたいてい相違している。最後に、双方の商品のおのの、他方の単独な商品種類にたいする等価であるにすぎず、したがって単独な等価であるにすぎない。』

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

一七

阪南論集 第八卷

一八

1545 見られるとおり、上衣がリンネルの等価であると同時に、リンネルは上衣の等価である、と説かれていて、価値形態の対極性は明らかに『あいまい』となっている。³⁾

以上の三つの引用文は、氏によれば、マルクス自身が、「同等性関係」＝「価値関係」を設定したうえで価値表現を説くことから、『両極的対立をとり押えるにはまだ骨が折れ』、両極的区別が『あいまいにされている』³⁾として、「対極性」の意味が失われることを表白している、ことを示している。だから氏はマルクス自身に即して、一層『資本論』の価値表現は相対的価値表現ではなく、相互的価値表現であると言われるのである。だが、三つの引用文はそれぞれ氏の主張を裏づけるものであろうか。それが問題である。(1)の引用文から検討しよう。

マルクスは(1)の引用文のすぐ前のパラグラフで、量的規定性は商品の等価形態にはふくまれていない、ことを述べている。一商品は他商品の価値表現の材料として役立つかぎりでのみ、直接的な交換可能性の形態をうるのである。それは相対的価値形態の商品が自分自身の価値量を表現するイニシアティブをとり、他商品を等価物たらしめるからである。つまり、等価形態の商品の自然的形態が価値形態である。価値物そのものである。だから、等価形態の商品の価値量はけっして表現されないし、表現される必要もないのである。これらのことを述べ、(1)の引用文へ移るのである。

(1)は「単純な価値形態」において、相対的価値形態と等価形態との区別はあいまいであること、区別がはっきりしないことを述べている。なぜなら、20ヘンツのニクネン＝1枚の上衣、という価値表現は、1枚の上衣＝20ヘンツのニクネン、という価値表現を「逆の連関」で含んでいるからである。つまり、二〇エルレのリンネルは相対的価値形態にあると、同時に、逆の価値表現で等価形態にありうる。このことは一見すると相互的価値表現を裏付けているかのようにある。だが、そうではな

商品生産者A、Bの交換取引をみるとこれはよく理解できる。マルクスは述べている。

「彼らは、ながながと商議したのち、ついに意見が一致する。Aは、二〇エルのリンネルは一枚の上衣に値する、と言ひ、そしてBは、一枚の上衣は二〇エルのリンネルに値する、と言ふ。ここでは、両方が、リンネルと上衣とが、同時に相対的価値形態と等価形態とにある。しかし、注意せよ、まったく同時に出現する、二人の異なる個人にとって、および二つの異なる価値表現においてである。Aにとって、彼のリンネルは——彼にとって主導権は彼の商品がもつのであるから——相対的価値形態にあるが、これに対して相手の商品、上衣は等価形態にある。Bの立場からすればこの逆である。したがって、同じ商品はこの場合にもやはり、同じ価値表現において同時に両形態をけつしてとらない。⁵⁾」

引用から明らかのように、単純な価値形態では価値表現は、それと正反対の価値表現を逆の連関で含んでいる。価値表現は交換の準備形態であるから、交換がくりかえし行われ、客観的に妥当な交換比率が確立されている状態を前提すると、一つの価値表現とその正反対の価値表現とが事実上、存在しているということが、「前提そのものうちに含まれている⁶⁾」。だから、単純な価値形態では等価形態の商品の謎性、つまり直接的交換可能性という社会的性格を商品体がもつという「虚偽の仮象⁷⁾」は固定されていない。なぜなら、形態Iでは逆の価値表現を含むことが明らかであり、どちらの商品も等価形態をとりうるからである。

ところで、玉野井氏は「逆の関係において含む」ということから「相対的価値表現はたんなる相互的価値表現とひとしい」とされる。そしてもしも、氏の言われるように同じ価値表現において、相互的価値表現がなされるとすれば、一商品は同時に価値形態の両方の形態をとることとなる。これをマルクスは強く否定しているのである。以上みてきたように、リンネルの価値表現である、 $20\text{ Heller} = 1\text{ Stuck} = 1\text{ Stuck}$ において、同時に上衣の価値

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

一九

1544

阪南論集 第八卷

二〇

1543

が表現されることはけつしてない。上衣の価値が表現されるためには、 $1\text{ Stuck} = 20\text{ Heller} = 20\text{ Heller}$ という等式が与えられねばならない。つまり、「対極性」は価値表現の根本前提である。このことをマルクスは強調しているのである。

「しかし、上衣の価値を相対的に表現するためには、とにかくこの等式を逆にしなければならぬ。そして、そうするやいなや、上衣に代ってリンネルが等価物になる。だから、同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現われることはできないのである。この両形態はむしろ分極的に排除しあうのである。⁸⁾」

このように「対極性」を述べている。

(2)の引用文も、(1)と同じことを述べている。すなわち、単純な価値形態においては相対的価値形態と等価形態との対立がはっきりと固定していない。そして、この場合の「対立」の意味は、両形態の区別のことである。その区別が固定していないのは、一つの価値等式を右辺からみるか、左辺からみるかによって、同じ商品はどちらの価値形態をもとりうるからである。そして、一つの価値表現の両形態を転倒させても、同じ単純な価値形態であることにはかわりがない。だから等価形態の商品の独自の社会的性格も「ブルジョア的に複雑な目⁹⁾」にはみえないのである。つまり、直接的交換可能性の形態(等価形態)と、非直接的交換可能性の形態(相対的価値形態)との区別は明瞭ではない。

ところで、「全体的な、または展開された価値形態」——形態IIは、ある一つの商品の価値が商品世界の無数の他の商品で表現される形態である。そこで形態IIにおいて、等式の右辺と左辺の位置をかえると形態IIとはならず、「一般的価値形態」となる。すなわち、形態IIの「一つの辺をおきかえることは、この等式の全性格を変えてこれを全体的価値形態から一般的価値形態に転化させることなしには不可能である。¹⁰⁾」

一般的価値形態——形態Ⅲはすべての商品の価値が唯一の商品によって表現される形態である。等価値形態の唯一の商品は、ただすべての商品の価値の表現材料として役立つにすぎない。すなわち価値の表現手段という役割だけを受けもつ専門家となる。ところが形態Ⅰでは、逆の連関で、一商品が同時に相対的価値形態と等価値形態とをとりうること——これはもちろん相互的価値表現ではないことはすでに述べたとおりである——から、両形態の区別が未分化であり、不明瞭であった。つまり受けもつ任務がはつきりしていない。形態Ⅲは、その区別が分化し、役割が完全に分れるのである。だから形態Ⅲの両形態の区別は明らかである。すなわち、価値を唯一の商品で表現するすべての商品と、ただその表現材料としての役割だけを担う唯一の商品——一般的等価値物とである。だから、たとえ形態Ⅲの等式を逆にしても、等価値形態のすべての商品は一般的等価値物とはなりえず、特殊的な等価値物となるにすぎない。つまり形態Ⅱに逆もどりするだけである。

(3)の引用文も(1)、(2)と同様のことを述べている。(3)は(1)より一つおいた後のパラグラフであり、単純な価値形態の「逆の連関」のまとめの部分である。(3)と(1)との間のパラグラフでは、次のことが述べられている。

単純な価値形態では、等価値形態の商品の謎的性格、つまり上衣はそれが有する「保温する」という使用価値の性格とともに、他商品に対して直接的な交換可能性という社会的な自然属性を有する、ということがまだ確かなものとして固定されていない。すなわち等価値形態の虚偽の仮象はまだ固定されていない。

なぜなら、単純な価値形態において、上衣が直接的な交換可能性の形態であるのは、リンネルが自分自身の価値を上衣で表現するからであり、またそのかぎりである。そして「上衣の等価値存在は、いわばリンネルの一つの反映規定にすぎない⁽⁴⁾」ということが等式自身によって語られているからである。さらにまた、その等式自身がリンネルが直接的な交換可能性の形態である逆の等式をも含んでいるからである。

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

一一一

このようなことを述べた次のパラグラフが(3)である。(3)は単純な価値形態の「逆の連関」のまとめを述べている。すなわち、単純な価値形態では、価値の表現は相手の商品に対して互いに反対の方向であるとはいえず、同等(gleichmäÙig)であること、つまり、リンネルは上衣で表現し、逆に、上衣はリンネルで表現する、というように反対の方向ではあるが、互いにただ一つの商品によってのみ自分の価値を表現する単純な価値形態である。つまり、等式を逆にしても、同じく単純な価値形態であり、価値形態の意味はかわらない。さらにくわしく言えば、リンネルは上衣で表現し、上衣はリンネルで表現する、というように互いに逆ではあるが、相手の商品がきままっていることから、バラバラでなく一様な(einheitlich)単純な価値形態である。だが、これは一つの価値表現でなく、二つの商品の互いに正反対の二つの価値表現である。そして最後に、単純な価値形態では等価値形態の商品は、他の個別的な一商品に対する個別的な等価値物である。こうしたことを述べている。

以上のように、(3)は(1)、(2)で述べた「逆の連関」をまとめている。そして(3)の次のパラグラフは「単純な価値形態」の価値表現としての限界を述べ、「第二の、または展開された価値形態」への移行の条件を述べている。

われわれは、(1)、(2)、(3)の検討をつうじて、一つの価値表現はそれと正反対の価値表現を「逆の連関」で含むということを見てきた。そして、マルクスの価値表現は相対的な価値表現であって、けっして相互的な価値表現ではない、ということを見てきた。つまり「含む」ということは「同一」ではない。だから、氏の言われるように、「上衣がリンネルの等価であると同時に、リンネルは上衣の等価である」のではない。氏の場合、単純な価値形態で両形態の区別がはつきりしないことを、相互的価値表現の理由としているが、これは妥当でない。

さらに、氏がマルクスの価値表現を相互的価値表現とするのは、Äquivalentの訳に問題があるのではなからうか。Äquivalentは同等量の価値 gleichgrosse Werte (グロÙengleich) という意味と価値表現の等価値物と

う意味とがある。前者は二つの商品が価値量として互いに等しいこと、等価関係を意味し、第三者的立場より比較してゐるのである。後者は商品という具体物そのものが価値物であること、すなわち価値であることがありくとその商品で表示されてゐること、その意味であり、同等量の価値という意味ではけつしてない。このように Aquivalent のもと二つの意味を区別しなければ、氏の言われる相互表現となりはしないか。たとえば氏の訳されてゐる(3)の最後の文「双方の商品のおものは、他方の単独な商品種類にたいする等価であるにすぎず、したがって単独な等価であるにすぎない。」

この場合の Aequivalent は等価物と訳すべきであらう。

- (1) 玉野井「価値形態論」一三九頁。
- (2) K. Marx, Das Kapital, Buch I, Werke, Bd. 23, S. 82.
- (3) 玉野井「価値形態論」一四〇頁。
- (5) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, SS. 765-766.
- (6) 久留間鏡造『価値形態論と交換過程論』八五頁。
- (7) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 23.
- (8) K. Marx, Das Kapital, Buch I, Werke, Bd. 23, S. 63.
- (9) K. Marx, Das Kapital, Buch I, Werke, Bd. 23, S. 72.
- (10) K. Marx, Das Kapital, Buch I, Werke, Bd. 23, S. 82.
- (11) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 22.

1540

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

一三

阪南論集 卷八第

二四

1539

十 玉野井氏の主張の検討 (三)

玉野井氏はさらにマルクスの価値表現は相互的な価値表現であると同時に、二商品の等価交換の關係の表示であるとして、九の(3)の引用文につづいて言われる。

「見られるとおり、上衣がリンネルの等価であると同時に、リンネルは上衣の等価である、と説かれていて、価値形態の対極性は明らかに『あいまい』となっている。ところで、かかる相互的等価關係の基礎をなす『価値關係』は、上來みてきたごとき質的な同等性を表示するばかりでなく、量的な同等性としても把握されてゐるのである。」

すなわち、20ヘンツのニクセン＝1枚の上衣 という『資本論』の価値表現において、二〇エルレのリンネルと一枚の上衣とが同等量の労働をそれぞれ含んでゐるのであるから、両商品は「ただに『価値一般』ばかりか互いに相ひとしい一定の大きさの価値を代表した価値物として、直接的に『価値關係』をとりむすんでゐるというのであって、してみると、この『価値關係』はひっきよう等価交換の關係といつてよいであらう。このばあい、(1)『双方の商品のおものは、他方の単一的な商品種類にたいする等価であるにすぎず、したがって単独な等価であるにすぎない。』かくして(2)『二〇エルレのリンネルがある規定された大きさの価値として一枚の上衣で表現されてゐるばあいには、一枚の上衣の価値量もまた、逆の關係において二〇エルレのリンネルで表現され、したがって同様に量的にはかられてゐる』ということになる。」(この引用文中、(1)、(2)は便宜上つけたものである―尼寺)

このように氏は主張される。だが、われわれがこれまで論及してきたことから明らかのように、氏は区別して論

じなければならぬ二つのことを、一つのもの、同じものとしてしているのである。すなわち、二〇エルレのリンネルと一枚の上衣とが同等量の価値であること(等価関係)と、二〇エルレのリンネルの価値量が一枚の上衣で表現されること(価値表現)と、を混同し、同一化しているのである。否むしる価値表現を等価関係とのみみているのである。等価関係は『資本論』冒頭の章の第一、二節の商品の価値の实体、価値量の分析より当然、等置される二商品はそれぞれ同等量の価値をもつということである。すなわち二商品は等価関係にある。二商品が同等量の労働をふくみ、等価であるということは、もちろん頭の中での、観念的な抽象、分析によってえられる。これは分析者の立場から、等置される二商品の関係を第三者的にみてえられるのである。

価値表現は、一定の価値量をもつ二〇エルレのリンネルという商品の一枚の上衣による表現である。第一、二節の分析を通して観念的にとらえられた商品の価値(価値一般および価値量を含む)の他商品による表現である。つまり「商品語」で語っているのである。すなわち、眼にみえない商品の価値なるものの他商品を通して、「回り道」をして、ありありと浮き出させるための表現の仕方である。だから等価形態の商品は自分自身、価値物そのものである。したがって、等価形態の商品の価値を表現するなどということは問題とならない。量的規定性は等価形態に含まれていないのである。価値表現は第三者が両方の商品の価値量をはかって、そのうち両方の商品は等価であるという等価関係ではけっしてない。

二〇エルレのリンネルという商品の価値を一枚の上衣という商品の体で、一枚の上衣の体そのものの姿をとって、二〇エルレのリンネルに値するもの、という形態で、二〇エルレのリンネルの価値存在を表現する関係である。だから一枚の上衣は価値物そのもの、価値鏡として存在する。

このように等価関係と価値表現との区別を明確につけることによって、等価関係がただちに相互的価値表現に結

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

二五

1538

阪南論集 第八卷

二六

1537

びつくという誤りは回避できるのである。この区別が氏の場合、なされていない。

さらに『資本論』からの氏の引用(1)、(2)はいかにも相互的価値表現を理由づけているかにも見えるかもしれない。だが、九でも検討したように(1)は次のことを述べているにすぎない。単純な価値形態では、価値表現を構成する二商品は互いに他方の商品の個別的な等価物となる。ただし、一つの価値表現と、逆の連関においてそれに含まれている価値表現、すなわち正反対の二つの価値表現においてである。だから、一つの価値表現において相互に等価物になりあう、というのではない。

(2)は、リンネルの価値量とともに、上衣の価値量も表現されることを述べている。ただし、(2)も(1)と同じく「逆の連関」においてである。

氏は「ただし」以下のことを考慮されていない。したがって、氏の引用されている(2)につづけて、次のように重要なことをマルクスが述べているのを無視されているのも当然と言える。

「しかし、それは(一枚の上衣の価値量の二〇エルレのリンネルによる表現は——引用者)ただ間接に、表現の転倒によってであり、上衣が等価物の役割を演じるかぎりにおいてではなく、むしろ、それ自身の価値をリンネルによって相対的に表示するかぎりにおいてである。」⁹⁵

ここでは、等価形態の商品の価値は等式の転倒による、逆の価値表現においてのみ表現されること、したがって相互的表現でないことを、マルクスは強調しているのである。

かくして、マルクスは氏の言われるような相互的価値表現という誤解の生ずるのをあらかじめ察知していたようである。

(1) 玉野井「価値形態論」一四〇頁。

- (2) 玉野井「価値形態論」一四一頁。
 (3) K. Marx, Das Kapital, Buch I, Werke, Bd.23, S. 66.
 (4) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, S. 769.

十一 玉野井氏の主張の検討 (四)

以上みてきたように、同等性関係としての価値関係は価値表現の「対極性」と「抵触」するものではない。だが、「抵触」すると言われる玉野井氏は同等性関係と価値表現との関係をどのように考えられるのであろうか。氏は言われる。

「商品の価値が他商品の使用価値で表現されるためには、この二つの商品のあいだに一の『同等性関係』としての『価値関係』の設定があらかじめ要求されると考えるにしても、しかもかかる『価値関係』自身が、実は一商品の他商品による価値表現をおしてよりほかには設定されえない⁽⁶⁾」。

「しかも、リンネルの価値がリンネルとは異なった上衣の使用価値で表現されるためには、上衣も価値物としてリンネルと質的に同等なものでなければならぬ」ということは、リンネルの価値表現の根拠をなすものといつてよいが、問題は、こうした価値としての同等性が、リンネルと上衣とのあいだに共通な第三者として設定されるのではなくて、実はリンネルにとつて上衣という特定の使用価値が自己の価値存在にひとしいものとしてあらわれる、という形態をおしてよりほかには設定されえない、という点にある⁽⁶⁾。

このように、氏は同等性関係としての価値関係が価値表現にとつて「あらかじめ要求される」、「根拠をなす」と価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

二七

阪南論集 第八卷

二八

1535

して前半でそれを一応、肯定されるのであるが、後半で結局、否定してしまうのである。しかも、逆に、「かかる価値表現の根拠そのもの(同等性関係としての価値関係——引用者)が、価値形態として規定される価値表現をおしてはじめて設定されるものである⁽⁶⁾」と言われる。つまり「価値としての同等性」が価値形態によって「設定」されるのである。

すると、氏の価値表現の「根拠」は何であるのか。

「一商品は、自己の『直接的な価値存在としての、ある他の使用価値または商品体』に関連するのであって、二つの商品が互いに価値として直接的に関連しあうのではない。むしろ逆に、かかる価値関係が直接的に設定されえないからこそ、かかる価値形態をとることになるのである⁽⁶⁾」。

「諸商品は互いに価値として、抽象的・人間的労働の凝結として、直接的に関連することができず、だからこそかかるものとして関連するためには相対的価値形態を得なければならない⁽⁶⁾」。

さらに氏は価値関係を、「等価交換の論理、相異なつた使用価値の直接的交換関係を想定する論理⁽⁶⁾」と解釈している。そして、価値表現の根拠を、二商品が直接的に交換しあえないこと、つまり価値関係が設定されないことに求められている。

価値関係が右のような意味をもつものでないことは、すでに述べた。だが氏の主張そのものに忠実に従つたとしても明らかに氏の主張は、循環論に陥っているのではないか。一方で、価値関係は価値表現によってはじめて設定されると言い、他方では、価値関係が設定されないから、価値表現をとると言われるからである。

価値表現は、こうした循環論ではけつして理解できない。価値表現の根拠は、商品の価値が商品世界において社会的性格を有する、という点にある。それは私的所有と社会的分業にもとづく商品社会においては、生産の無政府

性が支配し、私的労働が直接、社会的労働として評価されずに、抽象的人間労働という「回り道」を通してのみ社会性がえられるためである。この抽象的人間労働の対象化されたものが価値なのである。価値は商品世界において生産者の社会的絆であり、「日常的思想形態としての『価値』」、他商品に「値するもの」⁽⁶⁾として意識される。このように価値は社会的性格を有するものであるから、一商品は自分自身に含む価値を自分の身体で表現できず、他商品を通して、すなわち他商品を等価物という価値鏡たらしめたいうえで、その他商品で表現されるのである。これが価値表現である。つまり商品を分析的に考察してえられたことを、価値表現は「商品語」で語っているのである。「もし私が商品としてリンネルは使用価値および価値である、と言え、それは分析によってえられた商品の性質に関する私の判断である。これに反して、20 Hemden = 1 Kammstrich の上衣 あるいは、20 Elre のリンネルは一枚の上衣に値する、という表現において、リンネルはみずから、それが、(一) 使用価値(リンネル)であり、(二) これと異なる交換価値(上衣と同等なもの)であり、(三) この区別されたものの統一であり、したがって商品であることを物語っているのである。⁽⁷⁾」

このように価値表現は商品の分析によってえられた成果を商品自身が語っているのである。

さて、以上のマルクスの価値表現は、同等性関係としての価値関係を基礎としている。だからリンネルは「(二) これと異なる交換価値(上衣と同等なもの)」と言える。玉野井氏は右の関係を否定されるのであるから、いかにして価値表現はおこなわれるのであろうか。氏は言われる。

「一商品リンネルが上衣の使用価値に関連するというのは、リンネルが使用価値を異にする上衣を自己に等置するということにほかならず、ひっきょうそれは、リンネルの上衣による価値表現にほかならない。⁽⁸⁾」

「リンネルはこのばあい(上衣の使用価値がリンネルの価値を表現するというばあい——引用者)、価値としての

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

二九

上衣と直接的関連を設定するかわりに、上衣という単独な一種類の商品の特殊な使用価値を自己の等価として、すなわち自己の価値にひとしいものとして設定しているのであって、これこそ、砂糖の重量表現などは異なった、商品価値の独自の表現様式にほかならない。⁽⁹⁾」

氏はここで「リンネルが使用価値を異にする上衣を自己に等置する」とか「自己の等価として、すなわち自己の価値にひとしいものとして設定している」とか言われる。だが同等性関係としての価値関係を否定していながら、なぜ「等置する」とか「ひとしいものとして設定している」とか言えるのであろうか。その根拠は示されていない。

そうとするならば「リンネルが上衣の使用価値に関連すること、価値表現ということになる。氏は、われわれが、(上)で検討した宇野弘蔵氏の主張される、価値表現を理解するのに主要な役割を演ずる「商品所有者の欲望」を明確に出しているわけではない。しかし、宇野氏の言われる「商品所有者の欲望」が、単純な価値形態から一般的価値形態にいたるまで、消費対象としてみることから等価形態の商品の単位量をそろえること、そして貨幣形態では相対的価値形態の商品が単位となること、これらのごとを「注目されるべきである」として評価している。したがって、氏もまた同様に同等性関係としての価値関係を「リンネルが上衣の使用価値に関連する」として、商品社会の独自の社会的関係を、自然的な超歴史的な使用価値と使用価値との「関連」に解消しているのである。以上のように、同等性関係としての価値関係を基礎としない価値表現がどのようなものであるかをみてきた。

- (1) 玉野井「価値形態論」一五四頁。
- (2) 玉野井「価値形態論」一五七頁。
- (3) 玉野井「価値形態論」一五六頁。
- (4) 玉野井「価値形態論」一五五頁。

- (5) 玉野井「価値形態論」一五七頁。
- (6) 玉野井「価値形態論」一五七頁。
- (7) 福井孝治『経済と社会』二九一―三三二頁。
- (8) 福井『経済と社会』三四八―三五五頁。
- (9) K. Marx, Das Kapital, I, 1. Auflage, SS. 775-776.
- (10) 玉野井「価値形態論」一五四頁。
- (11) 玉野井「価値形態論」一五八頁。
- (12) 玉野井「古典」一八七頁。

むすび

以上のように、われわれは価値表現の両極の「逆の連関」否定の理由(二)を玉野井芳郎氏の主張を中心に検討してきた。

氏の主たる論点は、同等性関係としての価値関係を価値表現の根拠とすると、価値形態の「対極性」の意味が失われて、相互的価値表現となる、ということである。われわれの検討の結果つぎのことが明らかとなった。

(一) 価値表現は同等性関係を基礎としているが、同等性関係そのものではない。価値表現と同等性関係との区別と連関を明確にしないで同一視するところから氏の主張が生み出される。

(二) 価値表現のイニシアチブは相対的価値形態の商品がもっており、「対極性」は価値表現の根本前提である。そして「逆の連関で含む」という意味は「同一」であるという意味ではなくて、まったく逆の価値表現ということであり、「対極性」に抵触しない。だから相互的価値表現ではない。

価値表現の両極の「逆の連関」について(下)

三二

1532

阪南論集 第八卷

三三

1531

(三) 単純な価値形態では、相対的価値形態と等価形態との対立(区別という意味)があいまいである。なぜなら一商品が逆の連関で同時に反対の形態をとりうるからである。つまり価値を表現する商品と表現手段となる商品との区別が、すなわちその役割が、等式を逆に向けかえても同じ単純な価値表現であることから、明らかにみえないのである。しかしこれは「対極性」に抵触するのではない。一般的価値形態では両形態の商品の任務分担は明らかであり固定している。すなわち価値を表現するすべての商品と表現手段のみを専門とする一般的等価物の商品とである。単純な価値形態ではこれが未分化であり、不明瞭であることから氏の主張が生み出される。

(四) 同等性関係を否定するのであるから、氏の価値表現は結局、使用価値への連関という宇野氏と同じ誤りに陥いる。同等性関係があつてはじめて、二商品は等置され、そして価値なる社会的性格が表現されるのである。

(五) 宇野理論の方法から由来することであるが、両形態の形態的特徴だけを主張して、価値表現を成立させる、共通の基礎、同等性関係をみないのである。ここに根本原因がある。

一九七三年二月二三日